

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	天心の墓に詣でたこと
Author(s)	大谷, 時中
Citation	茨城大学五浦美術文化研究所報(10): 7-8
Issue Date	1985-03-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/11858">http://hdl.handle.net/10109/11858</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

## 天心の墓に詣でたこと

大谷 時 中



所報第四号に所員の後藤末吉教授が「五浦の月―観月会の記」という一文を書きのこしている。おもえば、ことは既に昭和四八年の陰曆九月十三日にあたる十月十八日に催されたことであるが、この月見の会はいまも猶、私の脳裏をはなれない。それは五浦の月もさこそ、その折詣でた天心の墓にある。私がこの研究所に関係したのは、宮田俊彦教授が所長の頃で、教育学も一人ぐらい、いたらよいであろうとのことで仲間入りさせていただいた。時折の研究会は予測したごとく私に縁遠いものが多かったが、だんだん接触するにつれて関心をもつようになった。殊に、この観月会にさきだつて当日の夕暮、所員一同そろって天心の墓を訪れ、その靈前に接してからである。

仍て、天心の墓であるが、こんもり盛られたさやかな土の山で墓碑がみえない。その入口に「天心先生墓所」の文字をみなければ、恐らく何人も天心の墓であるとは気がつくまい。私は始めて天心の墓に接したこともあるが強烈な奇異の感にうたれた。これが日本美術の改革に生命を投じ、また「亜細亜は一なり」と東洋の目ざめを啓蒙した天心・岡倉覚三の墓なのかと。然し後日その想いをあたためていくと、そのひとりの小さな土まん頭に意味をみいだした。

美術家のヴィンケルマン(J.J. Winckelmann, 1717~1768)は、且て古代的造形の本質を「その高貴な単純さと静かな偉大さ(edle Einfach und stille Größe)」にあるといったが、天心の墓がいみじくもそれを表象しているのではないか。且て、私は西安を旅行した折、秦の始皇帝の陵に接した司馬遷の史記によれば彼の墳丘は七〇余万人の徒刑者を使役して地下の水脈に達する深坑に銅板を敷きつめて墓室にしたというのであり、しかもその近辺に彼を護衛するための兵馬俑を埋めた俑坑が発掘されて世界を驚愕せしめている。私もその雄大さに眼を見張った。そして、その雄大さの量には天心の一握の土まん頭は及ぶべくもない。然し雄大さではなく偉大さの質に於て天心の墓はヴィンケルマンの言葉のごとく、多くの示唆を我々に与えている。

宜なる哉、彼の「茶の本」には「花はわれらの不断の友」と談じ、破れ籬の前に座して野菊と語った陶淵明や、西湖の梅林を逍遙しつつ忘我の境に入った林和靖等の風雅を云々し、這般に光明皇后の御製といわれる「わがために花は手折らじされどただ 三世の諸仏の前にささげん」の一首を引用注記している。かかる深淵な哲学的芸術観に由来する天心の無我の胸懐が、五浦に学んだ碩学の美術家をはぐくんたであろうことを私なりに理解した。爾来、私は土饅頭の天心の墓に一層の敬愛を抱くようになった。

聽て来るべき新しき世紀には老いる者から枯れていくであろうが、若き世代が更に慧能を傾注して天心の土饅頭の墓に意味を創造していくことを期待する。

(一九八四・一〇・一〇)

(元所員)